

西田長寿 編輯  
植手通有

## 陸羯南全集

小杉 彌景

陸羯南の名は明治言論界の雄として当時聞へてゐたに  
拘らず、死後六十餘年、今日一般的にはや、忘れられつ  
のあるやうである。勿論、研究者にとっては依然として  
極むべき高峰であり、その研究・論評亦必ずしも少しと  
しないが、例へば松本日々に接する青森の年少達でさへ  
その名を知る者は希であつて、その默蘇峰・雪嶺がとも  
かくも彼等の記憶の一部に在るのに比して如何にも寂し  
さを覚れない。これは、一には言論人としての彼の生命  
を跡づけるあの咫尺な量の著述そのものが、久しく保存  
せられた儘、僅かに鈴木虎雄博士の『羯南文録』との紐  
に懸る外は広く世に示される事なく過ぎて来た結果、入  
物・思想史の方面からなされた論文の類を通じて把握す  
る餘地はあつたにしても、概して印象の素材を欠き勝ち  
だつた事にも因らうか。而して、斯る一級史料の入手難  
という事情が、新たに研究を志す者にとって決定的障礙  
であつた事、言ふ筈もない。

『陸羯南全集』の第一巻が、その道の人々の待望の聲

に依つて、又すず書房から発刊せられたのは去る四十三年の十一月であつたから既に三年になるが、この間、巻を如へて今日第六巻目を見るに至つた。当初、三ヶ月に一冊の配本を予定してゐた発行所の意向にも拘らず、實際にはしばしば遅れ勝ちになつたといふ一事は、それのみで、本全集編輯の並々ならぬ勞苦を物語るであらう。こゝを以て、編輯者の多年の御努力に依り、羯南の全著作を網羅した全集が世に表われた事は、近代史の史料が一の整つたといふ意味で誠に快挙と爲すに値しやう。私も羯南の名を知り、何よりも先づその風貌に心意かれた一人として、本全集の完成に近きを喜び、この難事業に乗り組まれた二先生に深き敬意を捧げつつ、その思ひの現なる方まり、身の未熟を顧す敢へて紹介の筆を犯らせて置くものである。

先づ全体の構成につき述べれば、全八巻（第六巻既刊に付巻一卷を加えて総計九冊、各巻とも45冊。而して本巻八巻の内容は、①羯南の生前に於て単行本として出版せられた著作、②『東京電報』社説、③『日本』社説（『大日本』社説も含まれる）よりなり、従つて、明治十八年より全三十九年に至る間に彼が公にした著作は全て収録せられる筈である。又付巻には『日本』社説総目録、陸羯南に関する回想・論考、年譜研究等の他、羯南の書簡をも収める予定と伝えられるから羯南研究の手引

として大いに有益のものとならう。尚、編輯の基本的方針として次の二点を紹介しておきたい。その一つは、収録に當つては、新聞への掲載日付を以て順序とした事がそれである。凡そ明治の時代を色とる政治社会上の諸問題の中、その主要な課題に対して『日本』が如何なる態度を表明したかを知らんとする場合は、羯南の筆になる多くの論述を、例へば、問題別に分類収録した書物があるならばそれは一応便利であるが未知れない。然しながら、一般に歴史学の例で個人を祀へる唯一の方法が彼と時代の相関に着目する事である点に留意すれば、時代に生きた羯南の発言は、やはり明治の年代と共に順に排さるべきであつて、別して原典史料集たる本全集が所謂編年の体を採つてゐる事は、内容が新聞記事であることの当然性を除いてもなほ意義あることとすべきであらう。

第二の点は、出来るだけ遺漏を防ぐとの立場から、無署名社説にして内容、文体より見て羯南の筆になるやを疑はしむる右の如きも、証拠明確ならざる限り全て収録した事である。従つて、本全集を史料として用ゐる時、極めて部分的にはあるがなほ史料批判の作業を必要とすることになる訳であり、而も、後日の研究の進展の結果によつては本全集中より削除を要する部分が生ずる可能性はある筈であるが、それとてこれを恐れて予め疑はしきま皆いた結果生ずるかも知れない遺漏といふ虞失には比すべくもないから、以て至当の方針としてよい

であらう。

終りに、全体について所感の一端を述べれば、各巻末の「解説」が行き届いてゐる点を挙げねばならない。關連事項の中でも当時の主要新聞の発行部数や日本が蒙った発停處分回数を掲げた図表等、当時の政情と照し見て興味をひくに足るものであるし、又、校訂の際問題になった原本の異同について濃かな記載がなされてゐる点は、とりわけ本全集の学問的価値を高からしむる要素であると言へやう。

以上、全般について収録内容並に原則を粗略ながら紹介して来たが、次に、巻を遡つてなほ多少の説明を試みることにする。

第一巻（本文六八三頁）は『日本』以前の場南の著作の集成であつて、前記單行本と『東京電報』社説とから成つてゐる。而して單行本収録の順序は、一、近時政論考、二、主權論、三、行政時言、四、原政及國際論、五、主權原論、となつてゐるが、因に以上の発行年次を示せば、『近時政論考』一明治二十四年、『主權論』一全二十三年、『行政時言』一全二十四年、『原政及國際論』一全二十六年、『主權原論』一全十八年であつて、収録の順序は各單行本の発行年次に拠つてゐない。それは、一、四がいづれも『日本』掲載の論文をまとめたものである所から、編輯の原則に基き紙上掲載の順序に従つた結果であり、

五の主權原論のみは、ド・メーストルの書物の訳書として一、四とは性格を異にするの故を以て最後に非したものである。次に『東京電報』社説は、その発刊の日、明治二十一年四月九日の分より、廃刊の日、全二十二年二月九日の分まで、見得た限り全部として収録せられてゐる。而して校訂に當つては、『主權原論』以外は紙上掲載のものを基準とし、單行本中の訂正又は増補せられた部分については刊本に従つた處であるが、それら主な異同については巻末「解説」に懇切な説明がある。

第二巻（本文七九五頁）は『日本』の第一声、すなはち明治二十二年二月十一日の「創刊の辞」に始り、翌二十三年十二月三十一日の分までを含む。而して内容の大部分が条約改正・憲法・議會等についての論述で占められるのは、時節柄とは言へ、そこに『日本』草創の期、場南の意氣盛んなる姿が在るやうである。「解説」には、これまでに知られてゐる以上のことはよくわかつてゐるし、なほ、『日本』創刊の経緯が一応述べられてゐて、初心者の爲に配慮せられてゐるのは嬉しいことである。なほ、場南以外の人の論文を含む等の理由から單行本として収録することを避けて来た『日本』外政私議（『山本育太郎編』）について、その収録論題と新聞への掲載月日とが解説せられてゐるのも周到な配慮と言へやう。

第三巻（本文七二八頁）は明治二十四年一月一日より、全二十五年十二月三十一日に至る二年分の『日本』社

説、或は、『大日本』(二十四年十一月二十三日刊)社説と篇より成る。而して『大日本』と言へば、それが『大日本』の発刊に準じて設けられた代替紙であった事は知られる所であるが、その辺にも『日本』の論鋒の鋭さが察せられやうか。因に、本全集に於ては『大日本』社説をそれとして別項に収めることなく、掲載日付順に『大日本』社説の排列の中に織り込む方式が採られてゐる(『大日本』社説には特に印をつけて)。これは巻末の「解説」によれば、抑々、編輯の手續に始るものとの事であるが、なほ次いで説明せられてゐる通り、『大日本』の残又本の新たな出現が容易に望み得ず、而も「武臣干政論」が『大日本』と『大日本』とに連続連載せられてゐる以上、体裁上はともかく、利用者の側としては、却つて本全集のやうな扱ひ方を便利とするだろう。

第四卷(本文七〇七頁)は明治二十六年一月一日より二十七年十二月三十一日までの『日本』社説に併せて『大日本』社説一篇を載せてゐる。而してこの巻こそは嚮南の所謂国民主義の真面目が最も躍如としてゐると言ふ点で、全八巻中の最主要部分となすべきであらう。しなはは明治期政治社会の一転期として目とられるこの時にあつて、一方には條約勵行論を以て伊藤内閣に逼り、他方に國家の第一義を対外的立國の基礎確立に求め、所謂對外硬論の健筆を振つたの大本巻に収められた部分であるからである。全盛期(発行部数に於ても)の『日

本』の生命の漲つてゐるのが本巻のやうである。

第五卷(本文六五四頁)は明治二十八年一月一日より三十年十二月二十七日迄、三ヶ年の『日本』社説である。この時期は日清議和の問題や戦後経営の策が世の論議を擧げただけに、本巻も亦当然ながらそれ等に關する論述が前半を埋め、後半には、戦後新たに展開せられて来る「政界昨今の現状に對して」、批判の論調が多くなる。但し、本巻は、三ヶ年分を含むに拘らず、頁数が他の巻に比して少くなるのは、やはり「解説」に言ふ通り、年令から来る嚮南の東へに因るものでもあらうか。なほ、「解説」には所謂「廿六世紀」事件につぎ、既略の説明がある。

第六卷(本文六四〇頁)は明治三十一年一月一日より全三十三年十二月三十一日まで、三ヶ年間の『日本』社説が収録せられており、巻中、支那問題に關する論述が多く目につくやうになる。又国内問題については、引き続玉藩閥政府と政党との妥協を批判して、立憲政治のなるべき姿を一貫して説いてゐる。なほ、中国分割に反對した立場については、國權論者なるが故の限界とでも言ふべき点も考へられねばならぬにしても、この時期の嚮南については、どちらかといふと最も「自由主義」的立場をとるやうになつてゐたとする「解説」の評価に従ひ度いと思ふ。

第七卷は未刊であるが明治三十四年より全三十五年の

第八卷には明治三十六年より三十九年、病を得て新聞を誤読するまでの日本社会説を収録する予定と言ふ。

以上、誠に内容乏しい紹介を試みたのであるが、日陸詩集の真価を伝へ得ない事はおろか、編輯者二先生の功きさへ汚す事あらはと予め大いに恐れてゐる。なほ、拙き筆の終りに希望を述べる事が許されるならば、鶴南が生前に賦し遺した詩の数々を付巻の一部に収録して欲しいと願ふものである。彼自らが編んだ詩集も在る事であり、それは彼の折々の所懐を伝えるばかりでなく、別して、言論人たる以前の鶴南の側面を語る史料的价值を言ふると思ふからである。

海牙書局刊

第一巻（第冊）

田〇〇〇円

第三巻・第巻

五〇〇〇円